

## 傘

私は現在24歳独身。狛江市の古い木造アパートに独居し、小田急線を利用し新宿にある出版社に通っている。内定時は編集部を希望したが、希望叶わず入社以来2年間校閲部で地味な仕事に従事している。もっとも校閲の仕事がつまらないというわけではない。寡黙な私には向いている。最初の1年間こそ使い走り程度の仕事しかさせてもらえなかったが、最近では、短文ではあるが、校閲者らしい仕事もさせてもらえるようになった。特に好きな作家の初稿が回ってきたときなど喜びで胸が躍った。

私は幼い頃から人付き合いが苦手であった。いつもひとりで過ごしてきた。私には年齢相応の羞恥心や常識に欠けたところがあり、オブラートに包んだ表現が不得手であった。悪気があるわけではない。ただ思ったことを正直にいう傾向があり対人関係に支障をきたした。

そのような私であったが、私はある事件を契機に人との関係に距離をおくようになった。家族に対しても、友人に対しても、例外なく。とにかく人と接しないことを心がけた。仮に人と接点を持たざるを得ない場合には、必要最小限の言葉を交わすことに徹した。自らその存在感を消し、透明人間化することを意識した。いわばそれが変わらぬ日常を維持していくための私なりの自己防衛策であった。

私には図書館で借りてくる本だけが唯一の友であった。自室で椅子に座り本の世界に埋没している時間こそが私にとって最も大切な時間であり、脳裏に描かれる空想の世界は私を幸福に誘った。かといって引きこもっていたわけではない。地方の小学校、中学、高校を無遅刻無欠席で卒業し、私は東京の私立大学へと進学した。大学ではインターシップも無難にこなした。単位を落とすことなく卒業し、業界中位の出版社に就職した。

私は小学生の頃から作文が好きで将来は小説家になりたいと思っていた。大学に入ってから、出版社の公募があるたびに短編小説を書いては原稿を送付していた。入選することは一度もなかったが…。

早春のある朝、私の手元に短い原稿が回ってきた。原稿といってもセミB5サイズのノートブックである。虐待を受け死亡した少年が書いた短編だという。未決囚として拘置所に拘禁されている少年の父親から弁護士を通じ編集部宛送られてきたものだという。編集部としては虐待に関する特集記事とともに月刊誌に掲載を予定しているらしい。一般原稿に落とし込む前に一度校閲部にも見てもらえ、ということらしい。

校閲部の部長は、部内で最も若い私に注目し、私にノートを渡し、「あとで君の率直な意見を聞かせてくれ」と言った。

私はさっそく『眼』と題されたその短編を読んだ。

## 眼

風が吹いていた。強い北風である。僕が住むマンションは南向きで、ベランダも南に面していた。北風は建物が壁となって阻まれ、冬、ベランダに出ても直接身体に強風を受け

ることではない。だがこうしてマンションのベランダに立って手すりにつかまり夜空を見上げていると、風の唸りとともに冷たい空気が舞うように足下を駆け抜けていく。

冬の空は雲ひとつなく晴れ渡り、輝く星で満たされていた。満月がひときわ強い光を放っている。濁りがなく透明度の高い夜空。僕はこの宝石をちりばめたような空間、静謐な世界に真っ裸で対峙していた。僕が身に纏っていた衣服は、ベランダの隅に設置してある鼠色のテントの中に脱ぎ捨ててある。そう、僕はもうずいぶん前からこの季節に死のうと決めていたような気がする。何もかもが崩れ去った冬に。はかりしれない沈黙が支配する冬に。

寒くはなかった。冷気はむしろ肌になめらかで決して肌を刺すようなものではなかった。すでに感覚が麻痺しているのかもしれない。

僕は死ぬ、夜が明ける前に。このベランダで、11歳の短い人生を閉じる。

死への甘い誘惑。僕はこの世に生を受け産声を上げたときから、死への甘い誘惑に心をとくめかせてきたような気がする。

「オギャー！」

僕が生まれたとき、父と母、そして三つ年上の姉は、初めて聴く僕の産声に笑みを浮かべ感嘆の声を上げたことだろう。特に父にとっては待望の男の子、長男の誕生である。父の喜びは尋常でなかったはずだ。だが僕にとって、この世に生を受けたこと、それは決して心地よい覚醒ではなかった。僕は、夜明けの雨音を産院のベッドで聴きながら、生まれる前の心地よい眠りの世界へ再び溶け込みたいと願った。安寧を与えてくれる夢幻の世界へ戻りたいと願った。

生まれたときの状況を自ら記憶しているわけがない。ただ生を受けた瞬間を想うとき、偽の記憶が淡い映像のかけらとなって、僕の心の中で回転し始めるのである。

父と母は僕を僕の言うがままに育てた。上等な服、上質な肉・果物・甘い菓子類、高価な玩具等々、決して裕福とはいえない家庭ながら、彼らは僕が望むものすべてを僕に与えた。僕に託す夢とともに。だが彼らの愛情で僕の心が満たされることはなかった。むしろ彼らの愛情を苦々しく思うようになった。次第に彼らの夢が重荷になった。

父と母が僕のために敷いたレール。そのレールの上を僕が疑いもなく走っていくことが彼らの夢、そして僕の義務。

…僕の義務？ レールの先に何があるというのか。父は登山好きが高じて出世コースからはずれたサラリーマン。母はパート勤めの主婦。彼らが抱くつまらない夢、高学歴のエリート育成。…結局、レールの先には何もない。ただ平凡で退屈な生活が待っているだけだ。

早く戻りたい、生まれる前のあの満ち足りた世界へ。

現実逃避が描き出す不確かな前世の記憶。いったいこの願望はどこからくるのだろうか。

僕は障害を負って生まれたわけではない。むしろ身も心も健康過ぎるほど健康に完全な人間として生まれた。だが僕は、この世に生を受けたと同時に僕という存在そのものが理に反していると知ってしまった。この世は不完全な人間で満ちており、完全な人間の居場所などないと。圧倒的多数の不完全な人間の常識は、完全な人間にとって非常識となり、完全な人間に犠牲を強いる。つまり完全な人間がこの世に生きるということは、苦痛の連続に耐えなければならないということだ。

去年の冬、ある晩、僕は自分の部屋で一匹の蚊を見つけた。夏に生まれ秋に死にそびれた弱々しい蚊である。蚊は机に広げてあったノートの白い紙の上を這っていた。痩せ細った冬の蚊。鉛筆で突いても、もはや飛んで逃げる気力もないらしい。僕は蚊を右手の人差し指で潰した。白い紙に血の染みがついた。指にも赤い血が残った。意外に多い血の量。甘い匂いがした。死臭。甘い誘惑。その晩以降、死への甘い誘惑が僕の心を支配するようになった。

死への甘い誘惑に身を委ねているうちに、僕の眼は邪悪な陰を宿すようになった。そしてその邪悪な陰は、時として僕に激しい暴力を振るわせた。肉親、他人、動物、物品、僕自身、暴力の対象に限りはなかった。

生きていくことへの苛立ち。最初、そのはけ口は、母への口答え程度であった。だが日がたつにつれ、それは暴力へと変貌した。些細なことで母を怒鳴りつけるようになった。腕力を振るって姉を泣かせるようになった。腕力を振るって小学校に通う同級生も泣かせるようになった。父の叱責など全く無視し、怒りにわなわたと震える父を逆に睨みつけるようになった。

同時に残酷な遊びが僕を魅了した。それはナイフで小さな虫を切り刻むことに始まり、やがて公園で拾った細い枝の先を削り、子猫や子犬を突き殺すまでにエスカレートしていった。小動物の断末魔の悲鳴で僕は幸福感に満たされた。とても楽しかった。

近所から絶えず苦情がきた。父や母は頭を抱えた。家族は過激化していく僕を恐れた。僕も制御がきかない自分を恐れた。母は姉をつれて僕の前から姿を消した。マンションを出ていったのである。父は僕の面倒をみるためにマンションに残りはしたが、僕にどのように接して良いか、考えあぐねている様子である。

「おまえのその眼が怖い」

父が僕に言った。鏡に映して見たが、確かに僕自身、自分の眼が怖いと思った。伶俐な刃物のような光と精緻な悪意の陰り。そのコントラストによって、僕の瞳の中にはいつの間にか底知れぬ深い谷間ができあがっていた。

狭いマンションの部屋で父に対峙するなんて冗談じゃない。僕は、昔父が登山で使っていた一人用のテントを押し入れから引っ張り出し、ベランダに張り、暮らし始めた。鼠色の薄汚れたテント。何を馬鹿なことを、と父は思ったに違いない。だが言っても聞かぬ僕に処方箋などないことを父はすでに理解していた。黙認せざるを得なかった。

もっとも僕がベランダにいるのは、父が家にいるときだけだ。学校から帰り父が帰宅するまではちゃんと室内にいた。学校帰りに買ったコンビニ弁当で早めの夕飯を済ませて、風呂にも入り、テレビも見た。ベランダに逃げ込むのは父が帰宅してからだ。そうしないとおそらく僕は何かのはずみで父を殺してしまうに違いない。

今日僕は公園である女と出会った。不思議な女であった。彼女は冬なのに日傘を差していた。白いドレスに身を包み、微笑みながら僕を見つめていた。日本人なのか外国人なのか、あるいはハーフなのか、よくわからない。年齢もよくわからない。

僕がベンチに腰掛けいつものように拾った小枝をナイフで削っていると、彼女は足音もなく現れ、僕の真ん前に立ち、僕の視界に影をつくった。クロード・モネの絵画から抜け出したような女であった。無言のまま僕を見下ろしていた。

「何を笑ってるんだ。刺すぞ！」

僕は立ち上がって叫んだ。すると女は、微笑みを残しながらくるりと背中を向け、僕から離れていった。ふと僕の脳裏に部屋で殺した冬の蚊が蘇った。この枝で女の背中を突き刺せば血が噴き出すだろう。意外に多い血の量。大量の血。そして白いドレスは赤い血で汚れるだろう。僕は思わず小枝を握りしめた。尖った先端を女の背中に向けた。だがそこまでだった。僕は一步も動くことができなかった。遠ざかる彼女の後ろ姿は、徐々に色を失い透明化し、やがて公園の景色に溶け込んでいった。

「…幽霊？」

僕は小枝を握りしめたまま呟いた。恐怖感はなかった。ただ疲労感だけが残った。これまで経験したことのない疲れ。僕は小枝を捨てた。

もう一ヶ月近くベランダで寝ている。テントの中にも蚊がいた。飛ぶ気もない弱々しい蚊。潰しても潰しても毎晩必ず一匹現れる蚊。僕の指を血で汚す痩せ細った冬の蚊。いつまでこのような暮らしを続けるのかわからない。いや、わかっている。そう、今日までだ。今夜はクリスマス・イブ。僕は決心したのだ。僕は今夜死ぬ。明日の朝には僕の凍死体が発見されるであろう。朝日を浴びて宝石のように輝く死体。眼を閉じた美しい死体。僕はそれを中空から見下ろしているはずだ。…美しい死体。…美しい朝。

夜なのに日傘を差した白いドレスの女がマンションの駐車場から僕を見上げていた。

父は酒に酔って帰ってきてそのままリビングで寝ている。泥酔し、コートも脱がず、背広を着たまま長椅子で横になっている。きっと朝まで起きることはないだろう。いや、もしかしたら二度と眼を覚ますことはないかもしれない。さっき寝ている父の頭を思いっきり蹴り上げてやったから。サッカーボールを蹴り上げるように。

…この文章を11歳の少年が書いたというのか？ これは小説か？ それとも遺書か？ さらに私が驚愕したのはその内容である。

…信じられない。日傘を差した白いドレスの女。クロード・モネの絵画から抜け出したような女。かつてその女は私の前にも現れた。そう、私が小学生の頃、公園で木の枝を削っていたときに。

…信じられない。これは私がかつて経験したことの再現だ。異なるのは、当時私が住んでいたのはマンションではなく庭付きの住宅であったこと、テントを張った庭には白いドレスの女が現れなかったこと、そして、真冬の凍夜、裸で寝ても、私は死ぬことができなかったということだ。

朝、散歩途中の叔父に見つかり私は死ぬことができなかった。あれほど強い意志をもって死に臨んだというのに。

おそらく編集部が添付したものであろう。少年のノートには新聞記事の切り抜きが添えられていた。

クリスマスの朝、男児凍死、虐待か？

25日、朝6時頃、東京都足立区内のマンションのベランダで男児が倒れているとの通報があった。警察が駆けつけたところ、裸で倒れている男児を発見した。男児はこのマンションに住む芹沢翔太君（11）で、特に目立った外傷などはなく、自宅マンションのベ

ランダで凍死したものと思われる。通報者は父親で、警察は男児の解剖を急ぐとともに、状況から虐待の可能性もあるとみて父親から詳しい事情を訊いている。父親は「息子の眼が怖かった」と話しているという。

少年の父親は、未必の故意による殺人罪で起訴されている。おそらく有罪であろう。

月刊誌の虐待に関する特集がどのような論調になるかはわからない。編集部の意向に校閲部が口を挟む余地はない。だが私は確信を持って言える。少年の父親は無罪であると。「…眼が怖い。…俺も言われたことがある。昔、父に」と私は呟いた。

「何をしている！ 風邪ひくぞ！」

高い位置から声が降ってきた。顔を上げると長身の男が私を見下ろしていた。近くで内科医院を営む叔父である。叔父はコートを脱いで私の身体を包むと私を抱きかかえ家に入った。それから叔父は急ぎ医院に戻り、診察鞆を提げて再び私の家に来た。そして私を診た。体温が多少低めであったが、それ以外特に私の体調に異変はなかった。

叔父はテント暮らしをしている私を心配して、散歩がてら毎朝私の家を見回っていたようだ。

叔父と父は長い間応接で話し込んでいた。私は、その間、隣室のストーブの前で毛布を掛けられ寝かされていた。歯の根も合わないほどの寒さに震えながら。

「あいつの眼が怖い」

父の声が壁越しに聴こえた。

「うちにくるか？」

応接間から出てきた叔父が私に優しく言った。私はうなずいた。叔父の隣で憔悴しきっている父の姿を見て、私は顔かざるを得なかったのである。

叔父夫婦には子供がなかった。私はしばらく叔父の家に預けられることになった。叔父は私を叔父の友人の精神科医に診せ、私に治療を受けさせた。

「何か意見はあるか？」

校閲部長が私に訊いた。

「とても11歳の少年が書いた文章とは思えません。確かに文字は稚拙に見えますが…」

私はノートに眼を落としながら答えた。

「表現力という点から言えば大人の領域にあるが、論理に飛躍があり、若さを感じる。このレベルの作文をする子供は何人もいる。私はおそらく少年が死ぬ前に数日間掛けて書き上げたものだと思う。『父は酒に酔って帰ってきて』以下は死ぬ直前に書いたものだろう。他の箇所と筆圧が違う。また字も乱れている。…少年の父親がこのノートを何の意図があって送りつけてきたのかはわからないが…」

「部長は本当に少年が書いたものだと信じているのですか？」

「そうだ。これは少年が書いたフィクションだ」

「…フィクション？」

「日傘を差す白いドレスの女をモチーフとして、自死をテーマに選んだフィクションだ」

校閲部長はそう言うと、自分で意見を求めておきながら私の意見もたいして聞かず、私

の手からノートを取り上げた。

…フィクション、フィクション、フィクション？ いや、違う。これはフィクションではない。ノン・フィクションだ！

私は心の中で叫んだ。

その日は他にたいした仕事もなく、私は定時に退社した。夜風が冷たい。私はコートの手を立てた。飲食店の多いネオンサインに彩られた街並みを抜け、私は新宿駅西口から小田急線に乗った。車内はそれほど混んではいなかった。私は思わずあの女が紛れ込んでいないかと乗客を目で追った。

…忘れていたのに。…あの女のことは忘れていたのに。…今さらなぜ？。

狛江駅で降りて古いアパートに向かう帰路、私はずっと少年の残した短編のことを考えていた。ふと道路の反対側を見ると、夜だというのに日傘を差した白いドレスの女の姿があった。微笑みをたたえている。恐怖感はなかった。道路を横切って女に近づこうと足を踏み出した刹那、激しいクラクションとともにヘッドライトの眩しい光が眼に飛び込んできた。私はトラックに跳ね上げられ宙を飛び道路に叩きつけられた。

静寂が私を支配した。私は道路の上で仰向けに寝転んだまま夜空に浮かぶ月を見た。見事なまでの満月であった。

「…やっぱり、こういうことかア。…わかっていたんだ、こうなることを。…ずっと前から。…そう、ずっと前から」

私は血の海のなかで月を見ながら呟いた。

明るく大きな月の表面中央部には、日傘を差した女の影がくっきりと映っていた。